

青島神社：日向神話館

日本神話では、創造神話に続き、天照大神が孫を天から降ろして天下を治めたという伝説があります。青島神社の「日向神話館」では、天皇家の系譜を物語る日向神話から 12 の場面を蠟人形で表現しています。

物語の舞台は日向国（現在の宮崎県）です。8 世紀当時に首都であった奈良にて神話が記された際には、遠く南東に面した日向は、昇る太陽、ひいては神々の領域に最も近い場所とされていたため、学者たちはこの地を舞台に選んだのでしょう。この太陽との結びつきは地名にも表れています。日向は、近世日本で唯一「太陽」を表す文字が名前に入った県でした。

場面 1

天高く、神道の神々の中で最も偉大な太陽神・天照大神が、孫の二二ギの前に立ちはだかります。天照大神は二二ギに地上に降りて人々を支配するように命じ、日本の主食であり繁栄の象徴でもある稲穂を渡します。座っていた 3 人の神々は二二ギに剣、鏡、宝玉という 3 つの神聖な宝物を贈ります。これらの品々は神の支配を意味し、伝説によれば、天皇から天皇へと受け継がれ、現在の皇室の宝器となっています。

場面 2

天から降りた二二ギは、山の神である大山津見の娘、木花咲弥と出会い、結婚を申し込みます。大山津見はこれに同意しますが、木花咲弥だけでなく姉の石長とも結婚するという条件を出します。しかし、二二ギは木花咲弥だけを選び、美しくない石長を拒絶します。大山津見は、2 人の娘と結婚すれば二二ギは永遠の幸せを手に入れることができたと明かしていますが、石長を拒否したことで、二二ギは不老不死でなくなってしまう。二二ギの致命的な選択は、生ける神とされた日本の天皇が、普通の人間と同じように死ななければならなかった理由の説明になっています。

木花咲弥はすぐに 3 つ子を妊娠しますが、二二ギは自分の子供だと認めることを拒否します。木花咲弥は、神の子供はどんなことがあっても無傷で生まれてくると確信して、自分の正しさを証明するために、自分自身を小屋に閉じ込め火をつけます。この物語は、古代の海域アジア全体で行われていた、その場を浄め、安産をもたらすために、出産に使う建物の周りに火を灯すという伝統を参考にしています。

場面 3

木花咲弥と二二ギの3人の子供は全員男の子です。その中には、狩猟の達人に成長した山幸彦と漁の名人になった海幸彦がいます。ある日、山幸彦は道具を交換してお互いの商売を知ろうと提案します。山幸彦は兄の釣り針で釣りに出かけ、海幸彦は狩りに挑戦します。しかし、山幸彦は借りていた釣り針をなくしてしまい、どんなに探しても見つけることができません。山幸彦は刀を折って新しい釣り針を何本も作りますが、海幸彦は受け取ることを拒否します。

場面 4

絶望した山幸彦のもとに塩槌という老人が訪ねてきて、船に乗り込み、海の神である綿津見の宮で兄の釣り針を探すように言います。

場面 5

海の神である綿津見の宮殿に到着した山幸彦は、井戸のそばの木に登ります。そこへ綿津見の娘である豊玉姫に使える女官(従者)が井戸から水を汲みに来ます。彼女は山幸彦に気づき、豊玉に山幸彦を紹介し、2人は恋に落ちます。綿津見は、山幸彦の血統が神聖なので、2人の関係を認めます。

神話では、山幸彦が登った木を「芳しい」と表現していますが、これは沈香や白檀など、古代アジアでは香りや薬効が高く評価されていた木を指しています。また、豊玉の従者が持っていた水差しは、8世紀の日本人から見れば世界一の権力者であった中国の皇帝の宮廷で使われていたものと同様のものです。このような細部は、神々の世界の素晴らしさを伝えるためのものでした。

場面 6

山幸彦は、綿津見の宮殿の盛大な宴に招かれます。山幸彦はのちに、2人をもてなすための踊り子の後ろに座っている豊玉と結婚し、2人は幸せに暮らします。

場面 7

綿津見の宮殿での3年間を経た山幸彦は、不安を募らせているように見えます。山幸彦は、なくした兄の釣り針を取り返すために海に出たことを思い出していたのです。豊玉は父に搜索を手伝ってほしいと頼みます。

場面 8

海の神である綿津見は、山幸彦が探している釣り針が見つかるように、海中の魚たちを宮中に集めるように命じます。口を痛めたという鯛を除いて、すべての魚が集まってきました。その怪我は釣り針が引っかかったことによるものだとわかったので、綿津見は鯛を呼び寄せます。

場面 9

なくした兄の釣り針を取り戻した山幸彦は、鯨に乗って岸に戻ることにしました。山幸彦が離れる前に、豊玉は「もうすぐ子供が生まれるから、お産のための小屋を建ててくれ」と言います。餞別として、綿津見は山幸彦に潮を操る一对の宝珠を贈ります。

場面 10

山幸彦は釣り針を海幸彦に返そうとしますが、海幸彦は受け取ることを拒否し、兄を脅します。山幸彦は海の神からもらった宝珠を使って潮を呼び込み、海幸彦は溺れそうになりますが、ついに屈服します。

場面 11

山幸彦は妻のために小屋を建て始めますが、完成前に妻が陣痛に襲われます。小屋の中に入った豊玉は、山幸彦に「子供が生まれる前の自分を見ないでくれ」と懇願します。しかし、山幸彦はその誘惑に抗えず、海の娘である豊玉が巨大な鯨に変身しているのを見てしまいます。正体がばれた豊玉は、生まれたばかりの赤ん坊を残して苦悩しながら海へと帰っていきます。子供のウガヤフキアエズは、豊玉の妹である玉依に育てられますが、この2人は後に結婚します。

この場面では、豊玉が子供に別れを告げる姿が描かれています。地面の黒い羽は、山幸彦が時間までに完成することができなかった小屋の屋根を作るために使ったものです。これは、安産の縁起物とされていた鵜の羽です。古代日本で行われていた鵜飼漁では、鵜がのどで魚を捕まえ、その魚を漁師のために吐き出す訓練をします。魚を吐き出すのが早いことから鵜は安産の

象徴になり、女性はお産の際に鵜の羽を近くに置いていました。豊玉の小屋の屋根全体がこの羽で作られていたことは、神の素晴らしさを象徴しています。

場面 12

ウガヤフキアエズと妻の玉依には4人の息子がいます。成長した兄弟たちは末っ子に率いられて日本全国制覇の旅に出ますが、この場面ではその様子が描かれています。日向から東進し、多くの敵と戦いながら、現在の奈良県にたどり着きます。そこで末っ子が政権を樹立し、自らを神武天皇であると宣言して、日本の最初の統治者となります。